Supported by 日本財団 THE NIPPON FOUNDATION

2022年度 日本財団助成事業

# 「コミュニティカフェ等、地域共生社会のための活動の担い手育成」

## 「地域共生ボランティアのすすめ」をテーマに 仙台市と京都市で開催

京都市国際交流会館で10月2日に開いた「啓発イベント」

公益社団法人長寿社会文化協会（WAC）は、2022年度日本財団助成事業として「コミュニティカフェ等、地域共生社会のための活動の担い手育成」を行いました。若者から高齢者まで地域に根差したボランティア人材を発掘して地域活性化の担い手とし、さまざまな活動に積極的に参加してほしいという目的で、啓発イベントとボランティアの養成講習を開催しました。全体のテーマは「地域共生ボランティアのすすめ」です。

この事業を開催しようとした大きな理由は、近年のWACをはじめとするNPO等非営利団体の現状に対する危機感があります。WACは設立当初からボランティア活動と高齢者の生きがい活動の推進を目的に全国的な支援活動を行ってきました。中心になったのは団塊の世代であり、元気高齢者の皆さんでした。

それから20年以上が経ち、その方々の多くが後期高齢者となりつつあります。助け合い活動等のボランティア団体では、会員の高齢化と減少に悩む声が聞かれます。

そこにコロナが襲い、行動制限によって高齢者から生きがい活動を奪ってしまいました。中には意欲の低下、健康の悪化を招き、取り返しのつかない事態となっている人もいます。厚生労働省が掲げているビジョン「地域共生社会」とは程遠い現実です。

そこで、ささやかでも、WACが目指してきた「地域住民が世代や分野を超えてつながることで、地域を共につくっていく社会の実現」に近付くような事業をと、思い立ちました。

コロナ禍で鮮明になった生きがいの場の喪失の危険性、社会からの孤立といった負の連鎖から、WACが長年取り組んできた生きがいづくり、活躍の場の創出に向けて取り組み、発信したいと考えました。

貧困問題からくる学習支援や子ども食堂などの情報、高齢者ケア、変わりゆく社会の中でのボランティア活動などをくみ取っていただきたいと願います。

本冊子が地域共生ボランティア活動のきっかけづくりの一助となれば幸いです。

### 「地域共生ボランティアのすすめ」事業概要

| 仙台会場●仙台市シルバーセンター、仙台市民会館 | |
|---|---|
| 啓発イベント | 9月25日(日)14時～16時20分 |
| 基調講演 | 池田昌弘<br>（NPO法人全国コミュニティライフサポートセンター理事長） |
| パネルディスカッション | 清水福子<br>（認定NPO法人あかねグループ理事長） |
| | 佐藤宏美<br>（NPO法人おりざの家理事長） |
| | 對馬良美<br>（認定NPO法人キッズドア東北事業部長） |
| | ファシリテーター　浅川澄一<br>（ジャーナリスト、WAC理事） |
| 地域ボランティア養成講習 | 10月22日(土)、11月5日(土)14時～16時 |
| 第1回　ボランティアの楽しみを知ろう～総合編 | 昆布山良則<br>（東京2020オリンピック・パラリンピック大会ボランティア） |
| 第2回　ボランティアの楽しさを語ろう～実践編 | 清水福子<br>（認定NPO法人あかねグループ） |
| 見学実習 | キッズドア |

| 京都会場●京都市国際交流会館、ハートピア京都 | |
|---|---|
| 啓発イベント | 10月2日(日)14時～16時20分 |
| 基調講演 | 早瀬昇<br>（社会福祉法人大阪ボランティア協会理事長） |
| パネルディスカッション | 小辻寿規<br>（立命館大学准教授） |
| | 宇野明香<br>（NPO法人happiness理事長） |
| | 狭間明日実<br>（バザールカフェ） |
| | ファシリテーター　浅川澄一<br>（ジャーナリスト、WAC理事） |
| 地域ボランティア養成講習 | 10月23日(日)、11月6日(日)10時～12時 |
| 第1回　ボランティアの楽しみを知ろう～総合編 | 小辻寿規<br>（立命館大学准教授） |
| 第2回　ボランティアの楽しさを語ろう～実践編 | 金治宏<br>（京都光華女子大学准教授、NPO法人happiness理事） |
| 見学実習 | happiness、バザールカフェ |

基調講演 池田 昌弘さん NPO法人 全国コミュニティライフサポートセンター 理事長

# 「つながる」から「気にかけ合う仲」に

講演する池田さん

「通いの場」の多くはコロナ禍で自粛していますが、案外、自発的な小さな集まりは広がっています。気になる人の家の前を通ったり、野菜を玄関先まで届けたり、夜電気がついているか見たりです。

群馬県の太田市の社会福祉協議会がアンケートで聞いたところ、いろんなことが分かりました。

85歳の一人暮らしの女性はコロナ前にしていた地域の役目がなくなりました。代わりに、ご近所さんとマスクを作り、友達と絵手紙を交換し、娘さんとビデオ通話をするようになりました。気が付いたらコロナ前よりつながりが広がったといいます。

吉沢町2区では、公民館での週2回の「お茶の間カフェ」を自粛し、町内を一周するお散歩会を平日毎日始めました。途中の公園でラジオ体操をして、東屋でおしゃべりもします。

80代の一人暮らしの方3人が毎日ウオーキングをしています。体調が悪いときは食事をおすそわけし、娘さんに連絡してくれる。ですから安心して一人暮らしができるそうです。

こうした頼り頼られるお友達や仲間との日常生活がみんなの人生を豊かにしています。「集める」から「集まる」への意識転換が必要かなと思います。

「あ、カーテン、今日も開いたね」と呼びかけるのは福岡県久留米市が作ったポスター。毎朝6時に浦田さんが半分だけカーテンを開けるのだそうです。「今日も何事もない」というサインです。

住民たちは見ているだけ。「確かな地域の力」というポスターです。小さな気にかけ合いが大切だと思います。

## 「支えられ下手」から変わろう

東日本大震災の時、仙台市内国見地区の高齢者の方たちを訪ねたら、「大丈夫です」と言われる。でも無理やり家をのぞかせてもらうとたんすが倒れ、畳が落ちている。困っていても「助けて」と言えない人が多い。

私たちは助けられることが苦手なのです。自分が困っても「助けて」と言えない「支えられ下手」です。

80代以上の方は比較的上手です。制度が何もなかった時代に助け合うしかなかったからです。でも私たち世代は苦手になってきたようです。一人っ子や独身者が増え、従兄弟姉妹がいない。家族や親戚で助け合うことが少なくなりました。

職場は、実は通いの場ですね。職場に来なければどうしたのだろうと仲間が探してくれます。会議はサロンですよね。少なくとも同僚としっかりおしゃべりができます。

福岡県久留米市のポスター

## 「お互い様」の関係で

ボランティアってどちらかというと「してあげる」話。「してもらいたい」人がいない限り、「してあげる」人ばかりいてもだめ。お互い様と言います。される側とする側が常に交互につながっていくことがとても大切です。

「つながる」ことから「気になる存在」が生まれ、「気にかけ合う仲」となって、ちょっと困ると「支えたり支えられたり」の関係になる。こういうことがないと孤立してしまいます。

孤立すると社会問題が起きてくる。孤立しないために、「いまあるつながりを切らない」。そして「新たなつながりも意識する」ことがとても大切ですね。

**池田昌弘さんの基調講演が終わると、仙台市で子どもや高齢者向けに活動中のNPO法人の運営者、3人が登壇した。それぞれの活動内容を語り、ファシリテーターの進行によるパネルディスカッションで議論を深めた。**

## 認定NPO法人「あかねグループ」理事長 清水福子さん

### マイカーで毎日配食、地域の福祉拠点として活動

清水さんの講演スライドから

地域のボランティア団体として1982年に10人の有志が立ち上げました。高齢者が在宅生活を続けられるようにという思いで、ヘルパー訪問と配食、それに介護保険のケアプラン作成やサロン活動をしています。

私は99年からボランティアとして加わり、8年前に5代目の理事長に就任しました。住民の誰でもが参加できるボランティア団体を目指すという創業理念がずっと続いています。有償と無償のボランティアが70人もいて、理事として活動している方もいます。

配食事業は、毎日、昼に60食、夜は150食ほどを届けています。200世帯前後になります。なかには、昼食と夕食の2回ご希望の方が7、8人います。厨房では40代～80代のパート、ボランティアさんが元気良く食事作りをしています。

配食の担い手の多くはマイカーを運転する高齢の男性陣です。夕食だと、お弁当を積み込んで午後4時頃に出発し、7台の車が2時間ほどかけてご自宅を回ります。

サロン活動は地域の居場所づくりです。ヘルパー訪問していた利用者宅が空き家になり、二間と台所をお借りして週2回の「ふれあいサロン」を開いています。

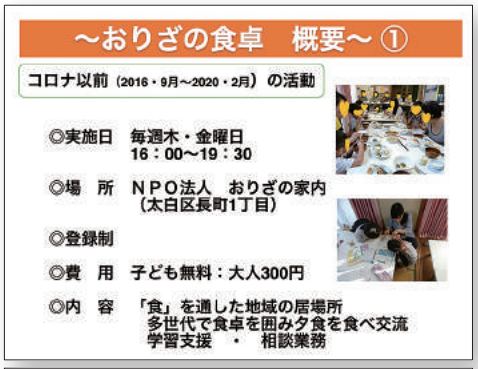
軽い体操や音楽・踊りの鑑賞、おしゃべりをしながら過ごします。昼食、おやつ付きで利用料は1回1980円です。本部事務所の1階のカフェでも、子ども食堂や認知症カフェを開いています。

マイカーに夕食を積み込み配達へ

あかねグループの本部

## NPO法人「おりざの家」理事長 佐藤宏美さん

### コロナ禍でひとり親家庭の利用者が増える子ども食堂



佐藤さんの講演スライドから、上下とも

自宅で玄米中心の料理教室を主宰していましたが、2013年にNPO法人「おりざの家」を作り食育推進と家族支援、生涯学習支援事業を始めました。16年に孤食や生活困窮家庭を対象に多世代向けの夕食支援の「おりざの食卓」を開きました。

仙台市内の52の子ども食堂の中のひとつで、毎週、木曜と金曜が活動日です。

コロナ禍での大きな変化は、会食からお弁当に切り替えたことと、ひとり親家庭の方々の利用が増えていることです。コロナ禍前には、40数人だった利用者が今では120人ほどに増えました。

なかでも、ひとり親世帯がとても多くなっています。48の子育て世帯のうち、ひとり親世帯は40％も占めています。仙台市全体では、子育て世帯に占める比率は6％ですから、その6倍にもなっています。

それだけコロナ禍で、ひとり親世帯の困窮度が高まっていると思います。また、お弁当にしたことで、コミュニケーションが苦手でハードルが高かった方々がより参加しやすくなったこともあるでしょう。

それと、フードパントリー（食材配布）が増えています。お米や野菜、麺、果物などを金曜日に軒先に出して置き、無料で自由に持ち帰ってもらいます。福島県のお寺さんなどから寄付を受けることが多くなって実現しています。

「おりざの家」外観

認定NPO法人「キッズドア」
東北事業部長 **對馬良美**さん

## 貧困家庭向けにボランティアで無料の学習支援

對馬さんの講演スライドから

渡辺理事長（右）も参加した学習支援

キッズドアは、貧困家庭の子どもが無料で勉強を見てもらえる仕組みを作ってきました。学生や社会人たちがボランティアで教えることができ、運営費用を企業や財団からの寄付で賄うという方式です。

2007年に渡辺由美子理事長が設立し、2010年に無料の高校受験対策講座「タダゼミ」を開講。翌年に無料の大学受験対策、中退予防のための「ガチゼミ」を開講しました。

東日本大震災後には、東北地方で被災者支援活動に乗り出し、現在も続いています。

設立以来、国や自治体に提言を続けており、渡辺理事長は内閣府の「子供の貧困対策に関する有識者会議」のメンバーになっています。

コロナ禍になり、ボランティア活動を志望する人が増えてきています。

せっかく大学に入学しても自宅でオンライン授業のため友達が出来ない、サークルや部活動の休止などで、人とのつながりを求めてボランティア活動に参加する大学生が増えました。

社会人も、終業後の飲み会や趣味の活動がなくなり、空いた時間を有効活用したいと思う方が増えたようです。

子どもはいろいろな大人と話すことで世の中のことを知って、それが勉強する動機づけになります。一度様子を見に来てほしいです。

キャリア教育の様子

## パネルディスカッションで

**浅川**　コロナ前とコロナ禍で変わったことは何でしょうか。

**佐藤**　元々高齢のスタッフが多いので、狭い調理場で密で働くのが不安でボランティアが減りました。

**清水**　作る弁当の数は変わりません。感染者宅への配達では手渡しせず、玄関先に置いています。

**對馬**　緊急事態宣言の時は、学校が「不要不急の外出をするな」と言っているので、「出て来て」と言いにくかった。オンラインで学習支援をしたり、1日中親と一緒や外に出れないストレスを減らすため、おしゃべりをしました。

学生も社会人も時間にゆとりが出て、ボランティアになる人が増えました。

**佐藤**　人と話すのが苦手な人は会食を利用できなかったのですが、弁当配布で初めて利用した人が何人かいます。潜在的なニーズを拾えたので、コロナは悪いことばかりではありません。コロナが鎮まり会食ができるようになっても、会食と弁当の両方とも行っていきたい。

**浅川**　ボランティアの受け入れ法や活動の様子は。

**清水**　その都度募集しています。男性は、定年退職後に何かできることをと来られます。弁当配達の車を運転する「カーボランティア」や草取りのボランティアになります。

女性は、友達の口コミで来るという人が多いです。

**佐藤**　子ども食堂の活動をちょっとのぞいてみたいと来られる。目的や意識はバラバラです。志をもってやりたいと来ても、半年、1年と経つと、意気込みがしぼんでいく人がいます。

どうにかモチベーションを持続させていくために、どうしたらいいかスタッフで考えています。利用者との触れ合いをとってもらったり、利用者にメッセージカードにコメントを書いてもらったりしています。子どもや困っている人の役に立っている、喜ばれていると思ってもらう工夫をしています。

左から清水さん、佐藤さん、對馬さん

**浅川**　自分がやっていることが社会に役立っていると思ってもらうことが、ボランティア活動の継続に効果がありますね。

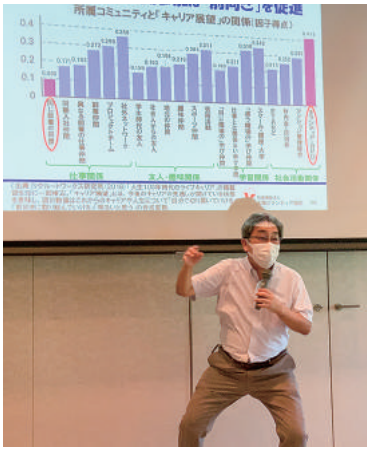
ところで、キッズドアにはシニア向けのメニューはあるんですか？ 中高生向けの個別指導だと学生が多いと思いますが。

**對馬**　そんなに専門的に教えられなくても、一緒に考えていこうという姿勢でやっており、先生や塾講師の経験はなくても大丈夫です。

基調講演

# ボランティアは「恋愛」に似ている

早瀬 昇さん　社会福祉法人 大阪ボランティア協会 理事長


熱弁を奮う早瀬さん

ボランティア活動はとても自由なスタイルだとまずご理解頂きたい。ボランティアのカギは「やる気（自発性）」と「世直し（社会性）」、「手弁当（無償性）」です。「放っておけない」からする。我慢してではなく、我慢できないからするものです。

社会性は「行政」の役目なので、お役所のようなスタイルが必要という勘違い、誤解があります。行政というのは、公平・平等にしますよね。全体の奉仕者だから。でもボランティア活動は「好き」から入るのです。自主的活動だから公平でなくていい。

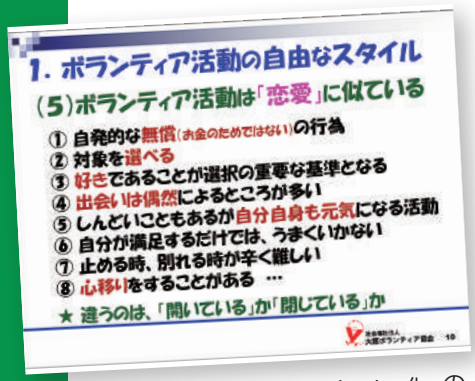
ボランティア活動は固いと思われる理由に、一度始めたらやめたらいけないと思われていることがあります。「細く長く」と言いますが、「長く続けるために、派手さは避け地道にコツコツ」という意味ではない。本来は「細くても良い。長く続けた方が楽しい、面白い」くらいの意味です。

## 私事を社会に「開く」

ボランティアは普段の暮らしに近いものです。では、どうすればボランティアになっていくのか。ヒントは「開く」です。趣味で美術品を集めている人が、その美術品を公開したら私立美術館になる。企業の福利厚生施設を開放すると社会貢献活動になる。私たちが休日に子どもや孫のほかに、近所の子どもを誘って出かけると、地域の子ども会活動となる。これが「開く」ということです。

大阪には町人が架けた橋がたくさんある。淀屋はなぜ淀屋橋を架けたか。「渡りたかったから」であり「渡らせたかったから」です。自分の店にお客さんが来てほしかった。つまり、「自分のため」でも、「みんなのため」にもなれば、「公共的」になる。自分のためだけでも良いが、そうでなくても良い、そういうものです。

ボランティア活動とよく似ているのは「恋愛」です。好きであることが重要。対象を選べる自発的な無償の行為。しんどいこともあるが自分自身が元気になる。自己満足ではうまくいかない。心移りもある。違うのは、開いているか閉じているかです。私たちの暮らしは閉じたり開いたりしています。




## ボランティアは「不公平」でいい

阪神・淡路大震災で救助された要救出者の4分の3は近隣住民によるものです。自発的だからこその強みとして、機動性、多彩さがあったからです。特定の誰かのために思いを込めて活動できるから「温かい」のです。

温かさは不公平なのです。公平な温かさなんてありえない。ほかならぬあなたのために、というのは家族にもできる、友達にもできる、ボランティアでもできる。だが行政にはできない。

しかも自己責任で活動できる。行政が作る公平な公共サービスは土壌で、その上に、多様な不公平な市民サービスが花を咲かせる。つまり、お役所の穴埋めではなく、役所を超えてできる。そういう存在です。

住民Aが焚火をすると、その煙で住民Bが迷惑だと役所に訴える。両者の間につながりがなく、「お客様化」社会なので役所は禁止命令を出す。本当は住民同士で話し合いや「私もまぜてよ」となればいいのに。他人事でなく自分が一緒に活動し当事者になると「どうしたらよいか」「自分で何かできないか」と思うようになる。自分が主体になってくる。

## 活動に参加すると元気に

認知症の地域別有病率の表を見てください。6つの地域の中で島根県海士町（あまちょう）だけが85歳以上でもあまり増えていない。不思議な地域です。なぜか。

子どもがいなくなったので始めた島留学制度の効果です。住民が皆役割を持ち、活動を進める立場になったからです。役割があると元気になる。いろんなことをどんどん自分たちでする町になった。

健康寿命の3要素は運動、栄養、社会参加ですが、社会参加では市民活動、ボランティア活動が重要だという調査結果は多い。それは明らかです。介護予防になることは明確で事例もたくさんあります。

実際にどのようにするか。趣味でも得意なことでも、好きなことからだと入りやすい。最初は半身でいい。思いつめない。

愛されることは大切ですが、愛することはもっと大切です。家族や仕事を愛してきた。それが我々の支えでした。でもいつか子どもたちは巣立ちいつか仕事もリタイアする。

そういう時に、地域で好きなものが何かあると元気になります。ボランティア活動というのは自発性が大事。自発的とは、言われなくてもする、言われても納得しなかったらしない。

MUSTではありません。CANの世界です。いろんなスタイルでできる。仲間と役割を得て、自分自身もますます元気になり素敵な地域を創造していきましょう。

**早瀬昇さんの基調講演に続き、3人の登壇者が自身の活動について話した。その後、パネルディスカッションで議論を深めた。**

バザールカフェ

## 狭間明日実さん

### 誰もが弱い存在でいいはず

建物は著名な建築家のヴォーリスが設計した

米国人宣教師の元住居を改装して24年前に開設したのがバザールカフェ。バザールとは市場のこと。市場のように人が集い行きかう場所を目指しています。日本基督教団京都教区と市民団体の共同事業として始まりました。

薬物依存症や就労が難しい人、滞日外国人などからいろいろな人の相談を受けたり、社会とのつながりを見出してもらう場にしていきたいと思っています。

ボランティアとして、カフェの調理や配膳、庭の手入れなどに参加してもらうこともよくあります。

誰でも700円のランチを無料で摂ることができる「サンガイ飯券（はん）」という食事券を2年半前から始めています。ランチを食べ終わって、もう一人分をレジで支払うとこの券がレジの前に張り出されます。後日、別の誰かが自由に使って「サンガイ飯」を注文できるものです。

お金を出す支援者と、それを受ける人が共に誰だか分からないところが特徴です。これによって、支援を受ける側の遠慮が消えてしまうことにもなります。

既に400枚以上も使われています。サンガイとは、ネパール語で「共に」ということです。

宣教師の元住居を改修してカフェに。右は手書きの「サンガイ飯券」

NPO法人「happiness」

## 理事長 宇野明香さん

### 子ども食堂から高齢者カフェまで

宇野さんの講演スライドから

ボランティア団体のハピネスが子ども食堂を始めたのは2016年でした。共働きの家庭で、孤食を余儀なくされたり、きちんと食事を摂れていない子どもがいないかと考えたからです。

立ち上げ当初は里子の受け入れはしていませんでしたが、現在2人の委託を受けています。仕事を別に持ちながら、子ども食堂を週2回開き、翌年には6人の大学生や10人ほどのボランティアさんを集めて夕方に月4回の学習会をスタートさせました。

いずれも、自宅近くの唐橋文化教育会館内です。

18年には、高齢者向けのコミュニティカフェ「ハピネスカフェ」を一軒家で開きました。子ども食堂を続けるためでもありました。翌年、NPO法人となりました。

さらに、22年2月には思春期の女性向けの一軒家のシェルターの運営を始めました。「安全な家出先」として、心理士や看護師も関わるようにしています。子ども食堂に通っていた子どもたちが中高生になり、家族と折り合いが悪くなった時に行き場がなくなる状況を見てきました。

児童相談所の管理的な一時保護しか現行制度では彼女たちを受け止められません。

ハピネスカフェの入り口

ハピネスカフェ外観

## NPO 法人「つながる KYOTO プロジェクト」
## 立命館大学准教授 **小辻寿規**さん

### ボランティア活動から社会を見る眼差しを

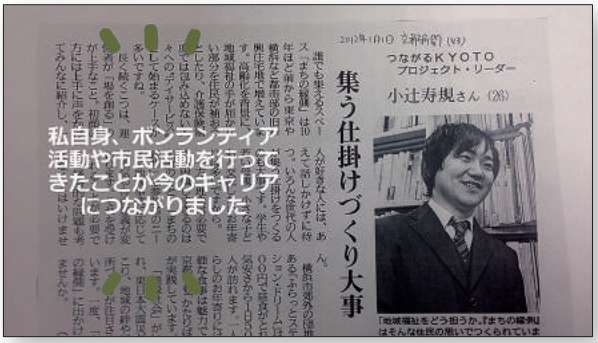
立命館大学の学生時代から「人と人のつながり」に興味を持ち研究を始めました。孤独死や社会的孤立、まちの居場所（コミュニティカフェ）をテーマにしてきました。

研究するだけでなく、自らボランティア活動や市民活動を実践してきました。理事長を務める「つながるKYOTOプロジェクト」では、コミュニティカフェの普及やその支援・研究活動とまちづくりの支援活動をしています。

活動の際に心掛けているのは、①メンバーの強みを生かす ②専門外のことにはあまり手を出さない ③外部の人を巻き込む ④活動のゴールを設定する ⑤無理をしない――ことです。

私が考えるボランティアとは、①自発的に他人・社会に奉仕する人または活動 ②本質は自発性と社会的な問題提起やその解決 ③無理やりやらされるものではない――。

地域社会でのフィールドワークで得たことを大学でのデスクワークに結びつけ、相互に循環させることが重要です。そうすることで、社会活動を通して学んできた市民性を研究の中で育むことができると思います。



NPO の活動から新聞で紹介された

地域と学生をつなぐ活動

コミュニティカフェの事例紹介

## パネルディスカッションで

**浅川**　ハピネスのシェルター「ハピネスハウス」とバザールカフェの「サンガイ飯」に注目しています。始めた動機は何ですか。

**宇野**　子ども食堂に来ていた子どもが高校生になって家出し、危険な目に遭う。それを止めようとハウスを始めました。

児童相談所の一時保護所はまともに保護ができていません。ひもがない服に着替えさせられたり、上の下着を着させてもらえなかったりします。スマホを取り上げられて外に連絡できなくなり、普段の生活のつながりが考慮されなくなったりします。一時保護所に行ったことのある子は、二度と行きたくなくなるのです。そこで、何とか夜を過ごさせてくれる大人を頼ってしまう。

それを何とかできないかと始めたのがハピネスハウスです。家出少女を保護したら逮捕されるとかグレーの世界です。行政や社協の応援はもらっていますが、それらのお墨付きというわけではありません。

**浅川**　対応しているのは専門職ですか。

**宇野**　夜勤は看護師や心理士が有償ボランティアで対応してくれていますが、学生もいます。

**浅川**　バザールカフェのサンガイ飯券はボランティア精神にあふれた仕組みだと思いますが、どのような経緯で始めたのですか。

**狭間**　緊急事態宣言の１回目の頃、情報が少なくて、どうしたらよいか分からないと、居合わせたスタッフ６人が話し合って始めました。２年半たって、350 枚くらいやり取りされていると思います。

意外と大人の人が使っています。顔が分からない匿名の寄付ですが、あげる人が食券にメッセージを書いたり、使った人が感想を書いたりしているので、コミュニケーションしている社会参加の一つの形と言えます。

誰が提供したか分からないので、「食べさせてもらっている感」がないのがいいと思います。バザールカフェという共通の空間だから使えるということでしょうか。

左から浅川澄一さん（ファシリテーター）、小辻さん、宇野さん、狭間さん

**浅川**　今の社会の制度にはありそうでない。特定の空間での共有体験、一体感というものでしょうか。

**小辻**　ハピネスカフェは、かわいそうだからやっているというわけではないというところが素晴らしい。手伝っている学生も勉強になっていると思います。

バザールカフェは、双方が同じ人として接するのが素晴らしい。「施し」ではないのが重要です。

# 「ボランティア活動の現場で感じたこと、学んだこと」
## ―見学者からの報告―

**地域共生社会を目指すボランティア活動の担い手育成のために、現場での見学実習を行いました。仙台市の「キッズドア」と京都市の「バザールカフェ」、「ハピネス子ども食堂」に伺いました。7人の参加者から事業内容とボランティア活動についての感想が届きました。どのようなところが印象に残ったかがよく分かります。**

## キッズドア
### 性格や能力に合わせて

**▼日野真弓さん（11月19日に訪問）**

貧困や不登校、発達障害を持っている子ども達に対して、きめ細かな学習支援を行っていて、子供達ものびのびと学習会に参加していた。

体験ツアーや見学会、交流会などのイベントを企画し、食料支援にも力を入れ活動は多岐にわたる。子供達の成長の後押しに、ただただ頭が下がる思いがした。

ボランティアの方は、子供達の性格や能力などに合う教え方、接し方を工夫して話しかけていた。皆さん楽しそうに参加され、とても雰囲気が良かった。

学生が多いが、定年退職者も参加され、子供達は色々な年齢層の方と接し、人間関係のよい勉強になると思った。

**▼都築広子さん（11月19日に訪問）**

学習支援のほか、企業にもお願いして食料支援も同時にされていてとても良いと思う。生徒さんが継続して通えるようで好感が持てました。

学生ボランティアの多くが、弟や妹に接するように親しみを持って教えているように感じました。ボランティアの方も楽しんでいるように思えました。

**▼柚原結女さん（11月19日に訪問）**

子ども達一人ひとりに合わせた学びが実践されていると感じた。ボランティアの方は1人につき1人、または2人の子どもに学習支援を行っているため、子ども達の状況を把握しやすく、それぞれに応じた学習が進められていると感じた。

ボランティアの方々はみなさん笑顔が多いと感じた。子どもの話を聴き、一緒に学習を進めるというスタンスがとられていた。

ボランティアの方々は幅広い年代の方が多く、子ども達にとっても、幅広い年代の人とコミュニケーションを取れたり、色々な考えに触れることができることに繋がるのではないかと感じた。

**▼菅原惺奈さん（11月19日に訪問）**

実習を受ける前は、こんなに明るい雰囲気とは想像できなかった。中学生の皆さんは気さくでこちら側までエネルギーをもらえた。

中学生の皆がリラックスして楽しそうなのは、ボランティアさん達との信頼関係があるからだと思った。

勉強だけではなく、話を聴いてあげたり、一緒にお話をすることで新しいコミュニケーションの場となっていて、すごく素敵です。

ただ教えるだけでなく、一緒に考えたり、1人で考える時間を設けるなど、それぞれの子に合わせたやり方なのも魅力に感じた。

キッズドア仙台教室の様子

## バザールカフェ
### 皆でフィリピン家庭料理を

**▼大道文子さん（11月19日に訪問）**

カフェの運営では、「共に生きる場」を創出されていると思った。「多様性」「共に生きる」「バリアフリー」「ユニバーサル・プレコーション（標準予防策）」をキーワードに活動されている。

フィリピン人の方がシェフで、フィリピンの家庭料理をみんなで協力して作られている。それぞれの方が出来ることをされ、工夫して意見を出されている。料理のメニューは毎週違い、国際色豊かである。居心地のいい空間が作られていると思う。

**▼土井義久さん（11月24日に訪問）**

キリスト教の方々と地域の方々が協力して、民家を改築されたことを学んだ。

前日に開かれたフェスタの後片づけから、カフェの営業だけでなく、ボランティアが役立てることがあると学んだ。ボランティア活動に対する考え方が良い意味で変わったと感じた。

## ハピネス子ども食堂
### ラインで予約は便利

**▼F・Oさん（11月23日に訪問）**

訪ねた日は、祝日のため子どもたちが少なかった。それでも予約なしで来る子ども達もおり、ボランティアと遊んだりしていた。参加の予約をラインで行うのは便利だと感じた。

大学生や社会人などボランティアさんは様々であった。よく来る学生には、子ども達もなついていた。朝から料理の準備をしていたというボランティアもいた。「出来る人が出来ることをやる」という考え方がよく分かった。

2022年度 日本財団助成事業「コミュニティカフェ等、地域共生社会のための活動の担い手育成」講演と講習の記録
発行日●2023年3月31日　編集●昆布山良則、久保田宏美　発行●公益社団法人長寿社会文化協会　制作●岡村直実（JCユニット）